
Angel Beats! + オリ主 ~Another story~

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! + オリ主 ↗ Another story

「」

【Zコード】

N5639Y

【作者名】

月下氷人

【あらすじ】

記憶を失った主人公「氷室^{ひむろ}」は目が覚めると、そこは『死後の世界』であった。

そこで『死んだ世界戦線』のリーダー「ゆり」と出会い、無理矢理主人公「氷室」は入隊させられた。どうやら天使のことを聞いたりすると消されるらしい。消されないために今日も戦線メンバーは天使と戦うのであった。

これはオリ主介入+チート?です。苦手な方は戻るボタンを。ヒ

ロインはゆりっぺです。あと私はこれが人生初の小説投稿なので、あたたかい目で見てください。更新は不定期ですが、なるべく毎日投稿できるよう、頑張りたいと思います。

Episode 1 死後の世界（前書き）

どうも初めまして。月下氷人です。最近A B C見てどうしても小説を書きたくなつて、つい書いてしまいました。人生初の小説投稿なので、何卒よろしくお願ひします。

（主人公 sides）

「ん……？」

目が覚めると、俺の視界からきれいな夜空が広がっていた。
なんで俺はこんなところで寝てたのか。そもそもここがどこなのか。
わからないことだらけだった。

「あら、目が覚めたようね」

突然、声をかけられたから後ろを振り向くと、そこにいたのは、黒
のニーソックスを履いた、紫色の短髪の女の子がいた。

「えつと……どちらさま？」

「そういうのはまず、自分から名乗るもんじゃない？」

「まあ、それもそうだな。俺は氷室だ。下の名前は……。わからな
い。お前は」

「ゆりよ。みんなからひめゆりって呼ばれてるわ。まあ、呼ぶと
きは好きなよつこみんでくれればいいわよ。よろしくね」

「ああ、まいじぐ

とつあえず簡単な自己紹介をした。あと何故スナイパー?を持つてこののかは気になるナビ、とつあえずスルーしといた。

「とつあえず歩きましょ」

「ちよつと待てー。俺は聞きたい」」とが「あ・る・せ・ま・しょ」

「…せー」

「まいじぐ

ゆつの言葉から殺意を感じたので、何も言ひ返すことが言えなかつた。

「えつと…。まいじぐ行くんだ?」

「校庭

何で校庭に行くのかわからなかつたけど、とつあえずついて行くこととした。

少し歩いて、やりは俺に話しかけてきた。

「氷室君。唐突で悪いけど、入隊してくれないかしら？」

「入隊？」

「おまえ、おまえのことは氷室君、あなた死んだのよ」

What? 何言つてんだこいつ? 頭がおかしいんじゃないか。

「はあ？」
「なに言って『ここ』は死後の世界よ。何もしなければ消されるとか」

「消される？ 誰に？」

「そりゃあ神様でしょ」

もうさつきから何を言つてゐるのかさっぱりわからない。俺が死んだ？ その時点でわけがわからない。俺は死んだ憶えがまったくない。というより自分の苗字以外何も思い出せない。

「じゃあ入隊つて？」

「死んでたまるか戦線によ」

「死んでたまるか戦線?」

「そう。まあ、要するに消されないために戦つていく組織よ。あ、ちなみにともとの組織名は死んだ世界戦線だつたけど、それだと死んだことになるんじゃね?つてことでいろいろ改名してつた結果死んでたまるか戦線になつたのよ。あと新しい名前募集中よ」

「まあ名前はともかく、戦つって何と?」

「天使よ、と噂をすれば

俺たちはいろいろと話しているうちに、校庭の近くの花壇についていた。校庭には銀髪のかわいらしい女の子がいた。

ゆりは携帯をポケットから出した。

「日向君。天使を発見したわ。場所は
校庭よ。大至急こちらに来て。あと新メンバーゲットよ

どうやら応援を呼んだらしい。

仮にここが死後の世界だとしても携帯は使えるんだな。

ゆりは携帯をポケットにしまい、あの子にさつきから持つていたスナイパー?を向けた。

「一応聞くけど、それ、本物?」

「あたりまえじゃない」

「何故女子に銃を向けている?」

「彼女が天使だからよ」

「本当に?」

「嘘ついて何になるつていうのよ」

「まあ、それもそうだけ?...」

でもイマイチ信用できない。どう見ても、見た目は普通の女子にしか見えない。

「誰が信用できな?」ですって!?」

あ、声に出でたか。

「女の子に銃を向ける奴が信用できるか!俺はあの女の女子にお前の話が本当かどうか聞いてくる」

「はあー? それ本気で言つてるのー?」

「ああ。 本気だ」

「あ、ちゅつと待ちなさいよ」

と黙つて俺は女子の方に向かつた。

→ O-side

「ゆりっぺ。 今来たぞ」

「あら田向君。 来たわね

「で新入りさんばかり。」

「あそこよ」

ゆりは校庭の方を指をさした。

「何で天使のところにいんだよー?」

「勧誘に失敗したわ……」

「何やつてるんだよ。 で、どうする?」

「まあ、とつあえず様子を見ましょ。 どうせ死ないし」

氷室 S.ude

俺はゆりの話が本当かどうか確かめるために銀髪の女の子のところへ行つた。

「ねえ、そこの君」

「？」

「なんか向こうにいるバカがお前のこと天使とか言ってたぞ」

「私は天使なんかじゃないわ」

「だよね～」

やつぱりそつだつた。こんな子が天使な訳がないよな。天使のよう
な可愛い子だけれど。

「じゃあんた何者?」

「私は生徒会長よ」

「やうか。じゃあもう一つ聞いていいか?」

「？」

「ハリゼンだ？」

「死後の世界よ」

あれ……。やつと同じことをいつてる……。

「は？マジで？じゃあ、証明してみろよー。」

「……ハンドソン……」

女の子の左手首あたりから刃物が出てきた。
そして俺の心臓をめがけてその刃物で刺そうとしてきた。
俺はなんとかよけることが出来た。

「ちよ、あぶねーじゃねーか！！」

「あなたが証明しりと聞いたから

「こきなりそいつことやるのかー。」

と言つてゐるうち、また女の子は俺に切りかかってきた。
暫く俺はよけ続けた。しかし、俺よくよけ続けられてるなー。なん
だか体が軽い。動きもよめる。あー、でもだいぶよけることがだる

くなってきた。よし、もう諦めよう。ここが本当に死後の世界なら心臓を刺されても死ぬわけないだろ？ 多分…。

俺はわざと心臓を刺された。やべつ。思つたよりすげー痛い。

そして俺は意識を失つた。

これから俺はどうなるのだろうか。

「なかなかやるじゃない、氷室君。あの天使と互角に殺りあつてしま

…

Episode 1 死後の世界（後書き）

楽しんでいただけただどうか？

小説書くのなかなか難しい。

更新は不定期ですけどなるべく早く投稿できるようにしたいと思います。

Episode 2 死んだ世界戦線（前書き）

やつらがキャラ崩壊してくるような…

（氷室 side）

「ん……」

目が覚めると、俺は上半身裸でベットで横になっていた。周りを見ると、どうやらここには保健室らしいな。外を見るともう暁くらいになっていた。

「あれ……？ 俺……」

あ。俺昨日あの女の子……いや天使に心臓を刺されたんだった。証拠に俺が着ていた学ランとワイヤーシャツが血まみれになっていた。やっぱり心臓貰かれても死んでない（この世界において）ということは、ここはやっぱここは死後の世界なのか。俺やっぱ死んだのか。生前の記憶全然ないけど。

もづけよつと寝ようかなーと思った時、

ガラッ

「あら、起きたのね」

中に入ってきたのはゆりであった。

寝よつと寝つたの……

「ああ

「それにしても氷室君、なかなかやるわね

「何が？」

「昨日のことじよ。天使と互角に戦つてたじやない

「いや。なんかなんとなく相手の動きが読めて……」

「ふうん」

自分でも驚きだつた。俺は生前何をやつてたのだろうか。軍隊にも入つてたんじゃないのか？ …いやないか。

「それより俺は聞きたいことが」「あつこれ。戦線の制服だからあとで着替えといで

少しば俺の話を聞いてくれ…

俺はゆりからブレザーの制服を渡された。

俺はもう入隊する前提かよ。まあ、昨日のことじよがあつたからまあ、いいけど。

「んじゃ、今着替えるわ」

俺はベットから降りて、着ているズボンを脱ぐとしたとき

1

と頬を赤くしながらゆりは俺に言つてきた。

「あ、いや。わりいー。お前を女だつて全然認識してなかつたら…

「それなら、アーヴィングが何を？」

ゆりは手首をポキポキしながら満遍な笑みをして言つてきた。ゆり
さん… マジで怖いですよ。

「ゆり。暴力はなしにしよう」

「死ね————！！！」

俺は顔面にパンチをおもいつきりくらった。ゆりは保健室を出てしまつた。マジでいてー。

「……。とりあえず着替えてこい」を出るか

俺は着替えて保健室を出た。

保健室を出たすぐ目の前にゆりがいた。
待つてくれたのか。

「あの……。やつは『メン

「……やつさのパンチでキャラでいいわよ。それより行きましょう」

「どうだ?

「私たちの本拠地へ

俺たちはゆりの言ひ本拠地へ向かった。

「やついえば昨日誰が俺のことを保健室に運んでくれたんだ?」

「私と日向君つて言つ人よ」

「やつか。ありがとな、ゆり」

「えつ／＼／＼ 氷室君が素直にお礼を言つとは…」

「言つちや悪いかよ」

「いや、別に…／＼ 天使を欺くの大変だつたんだからね／＼…」

少し頬を赤くしながらゆつは言つた。

そつか。あとで田向つていう奴にもお礼を言わないとな。

（ゆり side）

もつ。あんな笑顔でお礼を言われて、ちょっとドキドキしちやつた
じゃない。氷室君、けつこうかつこいいかも… つて私なに考えて
るんだる。まあ、頼りにはなりそうね。

（氷室 side）

「えつと… ちょっと質問していいか？」

「あ、でもそろそろ着くか？」

「やつか」

まあ質問はあとでいいか。

「まあ、着いたわよ」

「つてこい校長室じゃないか」

「 そうよ。そしてここが死んだ世界戦線の本拠地よ。天使の侵入を一度も許した事がないわ。ちなみに組織名を元に戻したわ」

「そうかい」

つていうかどんだけ名前にこだわっているんだよ…。

「とりあえず入るか」

「あ……。ちょっと待つ……」

ん?

俺がドアノブに触れた瞬間、巨大なハンマーが俺に叩きつけてとんできた。

なんとか自分の瞬発力でかわした。

「言うの忘れてたけど、ドアに対天使用の罠がしかけてあるから」

『三國志』卷之三

「てへつ」

「てへつ じゅねーよー！
やねーかー！」

危うく吹っ飛ばされそうになつたじ

「いやー。」めんめん。これには合言葉が必要なのよ。『神も仏も天使もなし』　「れでもう大丈夫よ」

「神も仏も天使もなしか」

俺は」の言葉を頭に刻み込んでおいた。

校長室に入ると俺とおんなじ制服を着た人達が何人かいた。

「おっ。」じつが新入りか

長олосを持つた男が言つてきた。

「あの黒をかわすとは。凄いなー」

今度は青髪の男が言つてきた。

「彼が朝、私が言つた新人よ。名前は氷室君よ。とりあえず皆、一人ずつ自己紹介してつて」

「じゃあまず俺から。俺は日向だ。見たどおり俺はかっこよ...」「見たどおりちやらんぽらんな奴よ」つて全然フォローになつてないぞ！

「まあ、たまに頼りになる奴よ」

「ようしきくな、氷室」

「ああ、ようしき、日向。そういえば、昨日保健室まで運んでくれてありがとう」

「いいくてことだ。俺たちも仲間だろ。」

「そうだな」

「俺は松下だ。ようしきな。」

「ああ、よろしく」

「彼は柔道が五段だから敬意を込めて、みんなは松下五段と呼んでいるわ。」

「松下五段か…」

「僕は大山。えっと…「特徴がないのが特徴よ」ははは…。よろしくね」

「ああ、よろしく」

「c o m e o n ~ l e t ~ s d a n c e ! ~」

「いや。躍んねーよ」

「彼なりの挨拶よ。みんなはTKって呼んでいるわ。本名は誰も知らない謎の男よ。ちなみに彼、英語得意そうだけど実際のところ全然できないわ」

「そうか。よろしくな」

「N i c e t o m e t o o ~」

「面白そうな奴ばかりだな～。」

「私は高松です。よろしく」

「よろしく」

「彼、頭良たそうだけどただの筋肉バカよ」

「そうなのか…」

「俺は藤巻だ。よろしくな。新人」

「ああ、よろしく」

「…………」

「えつと…」

「彼女は椎名さん。いつもあさはかなりいーと言つてゐるわ。彼女は可愛いものに弱いわ」

「そうか」

「私は岩沢だ。よろしく」

「ああ、よろしく」

「彼女はガルデモのリーダー兼陽動部隊よ」

「ガルデモ?」

「ガールズ・デッド・モンスター。略してガルデモ。バンド名のことだ」

岩沢が言った。

「へえーバンドやつてんのか

「まあ、そのほかにも…」

ゆりが言おうとした瞬間、ドアがバンッと開いた。

「おい、新人！ ゆりっぺが認めたからって俺は認めていな…」

ハルバードを持った男が喋ってる途中、ハンマーが彼に当たり、飛んで行つた。

ああ… 犀が作動したんだな。

「自分で仕掛けた犀なのに…。アホだ」

田向が呆れて言った。

「さつき飛んで行つたバカは野田君よ

「そうか

「他にもメンバーは何十人かいるわ」

「へえー」

暫くみんなと話をした。

みんなとすぐに仲良くなるができた。まあ、納得してない奴約一名いるが…。

「まあ、今日はもう解散でいいわ。別にもうやる事ないし…。あと氷室君。あとで屋上へ来て。聞きたい事がたくさんあるんでしょ?」

「ああ

ゆりが解散と言ったからみんな何処かへ行ってしまった。

……俺も行くか。

俺は屋上へ行つた。

みんな面白い奴だな。
なんだか楽しくなりそうだな。

Episode 2 死んだ世界戦線（後書き）

みんなどんなキャラなのか全然わからない…

主人公設定（前書き）

オリ主の設定です。
イメージを崩されたくない方は見ない方がいいかも…

主人公設定

若干ネタバレがあります

- ・名前 氷室 ひむろ
- ・身長 177cm (日向よりわずかに高い)
- ・体重 65kg
- ・髪型 ガンダムSEEDのキラ・ヤマトみたいな
- ・好きなこと (もの) 寝ること 100%アップルジュース
- ・甘いもの からかうこと
- ・嫌いなこと (もの) 特になし
- ・武器 主に日本刀
- ・顔 イケメン (本人自覚なし)

けつこうめんじくさがり屋。 けどやるときはやる。 頭はかなりいい。
けど、アホ。

日本刀をもらつてからいつも背中に背負つている。 少し鈍感。 子供
っぽい一面もある。 男友達では日向と一番仲がいい。 仲間思いであ
る。

生前と下の名前はのちに明かすつもりです。

Episode 11 の中野江つこじ (前編)

タイトルキーですみません。

Episode 3　「Jの世界について」

（氷室 side）

俺は今屋上へ向かっている。ゆりが屋上で話さうと言つたからである。

廊下を歩いていたら、掲示板にガルデモのポスターが貼つてあった。

「バンドか～。今度演奏聞いてみたいな」

「ねえ。このポスターみてるってことは、ガルデモに興味あるの？」

突如ピンク色の髪の女の子が俺に話しかけてきた。

「あなたその制服着てるってことは戦線のメンバー？」

「ああ。今日入ったばかりだ。」

「あなたが新人さんね。あたしユイっています。」

「俺は氷室」

「よろしくです。氷室先輩」

「ああ、よろしく」

先輩って言つてるからこいつ下級生か~。

「ところで先輩。ガルデモに興味あるのあるんですか?」

「まあ、少しば…」

「あたしガルデモの超ファンでアシスタントをしてるんですよ。もお~あたし岩沢さんのギターと歌が好きでー。特にCROW SOngsが…」

こんな話が暫く続いた。

俺のポケットに入つてゐる携帯が鳴つた。

「それで…」

「悪いいコイ

と言つて俺は携帯を取り出し、電話にでた。

「もしも…」「氷室君… いつまで待たせるのよ…」

「

「あ…。悪い。今すぐ行く

「10秒で来なさい

電話が切れた。ユイの話を聞いてたら、忘れてた…。ってか、いつの間に俺の番号知ったんだよ。俺にプライバシーはないのか…。

「悪い…、ユイ。今すぐ屋上へ来いとゆりが…」

「そうですか。わかりました。なんか呼び止めたりなんかしてすみませんでした」

「別にいいよ。ガルデモのことよくわかつたし」

「そうですか。じゃあ頑張ってください

「おは。じゃあ

俺はダッシュで屋上へ向かった。
ゆりかなり怒ってるだろうなー。

俺はこの世界に来て一番のタチショをした。

「はあーはあー」

「ユイつて奴に捕まつてた。」

「全く……。まあここわ。早速話をしましょ。でもさすから注意事項が」

なんだ?

「まず、授業や部活はまともに受けたはダメよ。消える対象になるから」

「わかつた」

「次に私たち以外の生徒：NPCつていうんだけど、そいつらには基本、手を出しちゃダメよ。あくまで私たちの標的は天使よ。それが私たちのポリシーよ」

「…あのゲームとかで一定の会話しかしない…」

「せうよ。例えて言つならばね。あつらひもとむじりてゐる模範つて意味よ」

「じゃあ話しかけても一定の答えしか返りへしないのか？」

「そんなことないわ。最初は私たちと違いがわからないはずよ。なんだったらそちらへんの女の子にカンチヨードもしてみたら」

「やうか。じゃあ…」

俺はしゃがんで、両手をあわせ、人差し指を伸ばし、ゆうにカンチヨードしようとしました。

「ちよつと…／＼／＼何私にカンチヨーしようとしてるの…／＼／＼

「お前がそちらへんの女の子にカンチヨーしてみればと言われたから

「人の話し聞いてた？　ＺＰＣの女に決まってるでしょ！…」

「そんなことわかつてこる。ゆうに殴られっぱなしだったからな。その仕返しだ！…」

ゆうは俺のことを蹴りたしたが、自分の瞬発力のおかげでかわすことができた。

「隙ありー！」

グサツ

「あんつ／／／」

俺はスカートの上からカンチョーすることに成功した。

俺はそのあとかなりボコボコにされたことはいつまでもない……

「……（）」の私がカンチョーされるとは…。一生の不覚だわ）」

「……もういいわ。それで何か質問ある?」

「えっと…じゃあ」って天国？ 地獄？」

「さあ。でも少なくとも地獄にはこんな立派な学校あるとでも？」

「確かに……」

「ここに来る人間は大抵、自分の人生が納得していない人が来るところよ」

「そうなのか……。ゆりも生前にいろんなことがあったのか」

「そうね」

「よかつたら聞かせてくれないか、ゆりの生前。嫌なら別にいいけど……」

「……いいわ、教えてあげる」

俺はゆりの過去を知った。

妹と弟を守れなかつたことに後悔しているらしい。

「そうか……。でもゆりって強いよなー。リーダーが務まつてる訳がわかつたよ」

「でも私は……」

「ゆりはなんも悪くねーよ。立派な姉だつたじやん」

「でも私はそんな人生にした神様を許さない。だから私は神様に抗つているの」

「セリフ…」

ゆりがあんな過去があるへりこだからみんなもそのへりこの過去があるのか。つてことは俺も……。

「じゃあ天使に従つたら消されるって言つてたけど、消されたらどうなる?」

「生まれ変わるんぢやない?まあ、生まれ変われても魂が人間に宿るとは限らなじし。ミジンコとかになるかも」

「ハハハ…。えつとあと……武器つくれるの」

「ええ、せりふですよ。何か注文とかある?」

「じゃあ…日本刀」

「なんで日本刀?まあ、いいけど。一応鏡も準備するわ」

「すまねえ」

「他に質問は?」

「腹つて減る?」

「普通に減るわ」

「季節つてあるっ。」

「あることはあるわよ。ちなみに今は一〇円よ」

「寝ると」まっ。」

「男子寮があるから後で口向君で案内してもいいって」

「ゆうのバストまっ。」

「……つて何言わせてるさじゅ……。」

「ぐはっ……」

「また顔面を殴られた。まあ100%俺が悪いけど……。」

「まったく。最初会った時は、普通の常識人だと思ったのに……。
またしてもアホが入ってくるとは……。」

「悪かつたな」

「で、もう質問は以上?」

「ああ」

「されじやあそろそろ晩御飯の時間だから食堂で一緒に食べましょ。はー」「れ食券」

「おっサンキュー……」この食券ライス（中）じゅん

「うひよ。私にセクハラ行為した罰」

「う……」

こうして俺の夕食はライスだなとなつた。
ライスだけじゃ足りなかつたので日向から肉つじんを分けてもらひつ
た。

俺は食後日向と寮へ行き、眠かつたからすぐて寝た。

なんだかめっちゃ疲れた……

Episode 3 IJの世界について（後書き）

ちなみに寮は日向と同じ部屋つてことにしています。男子寮は基本2人部屋で設定しています。

氷室「なんで日向と一緒に部屋？一人でゆっくり寝たいんだけど」

作者「まあまあ。落ち着け」

日向「そうだぞ」

作「日向はかなり喜んでたし」

氷「まさか…日向…ゲイなのか」

日「ひげーよ！…なんで俺が「それじゃあ

氷・作「次回をお楽しみにー」

日「人の話聞けーーーーー！」

会話文が多くなったしました。

どうしても空氣のなるキャラがでてくる...

基本主人公視点で行きます。

～氷室s.i.d.e～

俺は寝起きしようと屋上へ行った。

「いい天気だな～。それじゃあ、わっかへ寝るか

俺は横になり、睡眠を始めた。

「氷室君？ 今すぐ本部に来て」

「却下」

ペペ（携帯をあわぬ音）

俺は携帯をきつた。

もつちよつと俺は毎晩がしたいんだよ。

ペペペペ…（着信音）

「はあ～」

ペペ（携帯にたがひる音）

「もしも」来なかつた場合「ぶつ殺…」

ペペ（携帯をあわぬ音）

「はあ～」

ため息を2回もしてしまつた。…行くか。ぶつ殺されたくないし…

俺は校長室へ向かつた。

「うにす」

「おせーぞ！」

藤巻が言った。どうやら俺が一番最後に来たらしく。

「わりいーわりいー

「來たわね」

今度はゆりが言った。

「はい、これ。刀と銃よ」

「サンキュー」

俺が注文しといた武器をもらつて刀は背中にしょい、銃は懷にしまつた。

「おっ。刀か？。なんで刀にしたん？」

田向が聞いてきた。

「まあ、なんとなくだよ。なんといつか…。刀が好きなんだよ」

「やうが」

「やうじえばゆつ。武器つてどいで作ってんの?」

「ギルドっていう地下で作っているのよ」

「今度お礼でも聞こに行くわ」

「やう。今度案内するわ」

「とにかく今日の作戦はなんだ?」

藤巻が呟つた。

「やうね。じゃあ始めましょうか

ゆりが言つと辺りが暗くなり、スクリーンが出され、いかにも作戦会議つて感じになつた。

「今日は氷室君が作戦に慣れてもらいために、いつもやっている簡単な作戦に参加してもいいわ。その頃も…オペレーショントルネード」

「ええい」

「つ～む。ここはでかいのが来たな」

大山、松下五段が言った。

「トルネード…。それってどんな作戦なんだ?」

「生徒から食券を巻き上げる…」

「その巻き上げるかよ…」

思わずツッコんでしまった。
生徒から巻き上げるなんて…

「それ腰するにかつあげだら?」

「まあ、もうね」

「武器や頭数だけそろえてあげの果てにかつあげと…。あきれ

「貴様。それはゆつづに対する侮辱発言だ。今すぐ撤回しや

る」

野田がつつかかってきた。

「ひぬせえ！ ってかそんな危ないもの振り回すな

「んだとおーーー！」

「まあまあ、落ち着け2人とも。」

「おー、野田つち、氷室つち。『e1ax』

「さうだよ、野田君、氷室君」

「あさはかなじ…」

日向、TK、大山、椎名がフォローしてくれた。

「我々は数や力で生徒を脅かしたりは決してしない

松下五段が言った。

「続けていいかしら？」

「おー！」

「氷室君は武装して所定の位置で待機。天使が来たらその進行を食い止めて。細かい位置はあとで大山君か高松君に確認して」

「あははっ」

「ふっ」

ゆりがそう言つと、大山は俺に手を振り、高松は眼鏡をずらし、力ヶ口つけてきた。

「岩沢さん。今日も頼んだわよ。」

「了解」

「天使が来たら各自発砲。銃声が増援の合図になるから。氷室君、わかつた?」

「ああ」

「作戦開始時刻は1830。オペレーション、スタート……」

こうして俺の初めての作戦が始まった。
びつなるやい……。

作者「いや～。無事4話も終わりましたね～」

田向「やつだね～」

椎名「あさはかなり～」

作「小説書くの難しい～」

田「いやけいじ側とこで毎日更新してほしくよ。なあ椎名つか

椎「……」

田「なんかしゃべれよ～」

作「まあまあ。それじゃあ

田・作「次回をお楽しみに～」

椎「あさはかなり～」

Episode 5 オペレーショントルネード ～実行編～（前書き）

（略）

オペレーション実行編です

戦闘描写難しい

原作とは違うところがかなりあります。

つてか最初から違つか

Episode 5 オペレーショントルネード ～実行編～

（氷室s.i.d.e）

作戦開始30分前

俺は食堂の外で田向と話をしていた。

「やついえば、俺銃の使い方わかんないんだけど」

「銃は「うつて…」うつ撃つー。」

「ああ、なるほど」

俺はすぐに理解した。

「うつて…」「おー、なんで銃口をうつて向けてる?」

「撃つー。」

バンッ

俺は日向の頭を撃つた。

日向よ……。安らかに眠れ……。

10分後

「フアーラー！？ なんで俺を的にする？」

「いやー。手が滑った

「どうみても確信犯だろ！」

「あー、もつそろそろ時間だからもう行べや

「おいつ。人の話を聞けッ！」

日向を無視し、俺の所定の位置、第二連絡橋へ向かった。

食堂は今、大勢の生徒でにぎわっていた。

「いやあ、遊佐。岩沢さん、照明と音響の準備出来ました」

遊佐は岩沢に電話をしていた。

「了解」

よし、入江、ひさ子、関根、いつちよやるぞ！」

「おおー！」

氷室 Sides

俺は第一連絡橋で待機していた。

あーあー。俺もガルテンの演奏聽きたかったなー。
暇だからゆりにでも電話しよ。

「もしもし、何の用、氷室君？」

「あ……（暇だつたから電話したつて言つたら、確實にぶん殴られる。）
作戦中だし）　えーと……ゆりと話がしたかつたから電話した」

「え… / / / / い、今作戦中よ / / / / 用もないのに電話して」「ないで / / / / 「

「いへ」

ガチャ：（電話をきる音）

やつぱり怒られた…。

ψίδες

氷室君作戦中に何用も無いのに電話してきてるのよ。まつたく…。
でもわたしと話したくて電話したって…ってなに考えてるのよ私/
／＼今は作戦に集中しなきや。

「ふわ——…

俺はあくびをしていた。暇だな。

「セーで何してるの?」

「ん…うわっ…。天使じゃん。お、お前こそなにやつてんだよ?」

「今食堂でが大変なことになってるから、それを注意してたんだ」

「……悪いな。俺はお前をソリソリで足止めするためここソリソリで待機してたんだ」

「……うつ」

「つひ」とで帰ってくれ

俺は銃を構え、天使に撃つた。

バンッ

見事腹に命中した。

「よつ」

あると…

「Guard Skill」

天使の傷はいつも簡単に治ってしまった。

「ええーーー！ チートじゃんその能力」

天使の能力…する…

「… Hand Sonic」

あの時のように、両方の手首から刃物がでてきた。けど今回は…俺も武器を持っている。

俺は背中に背負っていた日本刀を抜いた。

「よつと」

「……」

キンッ

俺の刃と天使の刃が交じあつた。

キンッ キンッ キンッ

何度も刃と刃が交じあつた。
以外と動きについていける。

これならなんとかなる訳ないよな…。

（日向 side）

俺は食堂の前で待機してた。

バンッ

「おい今向こうの方で発砲したぞ」

野田が言った。

「向こうの方つて氷室がいる場所じゃん

これは少し痛いところに攻められたなー。

「援護しに行くぞ」

俺、野田、TK、松下五段、大山、藤巻で援護しに行つた。

氷室 Sides

キンシ キンシ

ああークソ。めんどくせー。早くみんな来いよ。

「おー、またねー。」

ねつ。ようやく来たか。

「わかつた」

俺はみんなのところに行つた。

「撃て————！」

田向の合図でみんなが撃つた。

「Guard skill」

だが、弾ははじき返された。

「チツ……」

「待たせたなー！」

「Get you little kills！」

「「JUちの弱」とこいをつかれたんじゃねかあーーー？」

「でもまだハンドソーフィクだけだよ

「つーむ」

田向、野田、TK、松下五段、大山、藤巻がかけつけて来てくれた。

「いやー、助かつたよ」

「けどお前けつこうつ余裕そうだつたじやん」

日向が言つてきた。

「んなことねーよ」

「みんな広いところへ行くな」

藤巻が言つた。

松下五段がロケットランチャーを吹つ飛ばし、広い所へ逃げた。

その後、椎名、高松がかけつけてくれた。
けど俺らはおされてた。

俺はゆりに電話をした。

「おこつめりー…まだか?」

「おこつめりー。あんまり回るのよ」

「あ…あれた。早くしてくれ…。
腹減つた…。」

（ゆり side）

その頃食堂は…

ライブは最高潮に達していた。

「やんそり頃合いね…。回せ」

私は遊佐さんに指示をだした。

「回して下せー」

遊佐さんはさらに別の人に対する指示をした。

巨大扇風機が回り始まつた。そして食券が勢いよく舞い上がり、外の方へ飛んでいく。

「とりあえず、作戦は成功ね」

「はい」

遊佐さんは言った。

「氷室 side」

突如紙が食堂から飛んできた。
そして俺はその紙を拾った。

「ああーこれ食券かー。もう何枚か拾つといー」

「氷室。とつとと行くぞ」

日向が言った。

「ひむ」

俺たちは食堂へ向かつた。

食堂にて…

俺はやうと日向と食事することにした。

俺は麻婆豆腐を頼んだ。

「こしてもこの麻婆豆腐やけに赤いな」

「え…氷室君麻婆豆腐にしたのー?」

「う」愁傷さまだ…

二人とも何言つてるんだ?

「まあどりあえずいただきます」

パクッ

「「…………」」

「ん…うう。辛い…けど意外とつまいかも…」

「無理しなくてもいいぞ」

「やうよ」

「本当につまいで。ほれ、一人とも食つてみる」

俺は麻婆豆腐を蓮華れんげですくい、まずはゆりに差し出した。

「いいわよ別に……」

「ほれあ～ん」

「あ～んじやないわよ／＼／＼恥ずかしいじやない／＼／＼

「ゆつづペが照れてる…。これはレアだ！」

「う、うひむせー／＼／＼

「ほれ」

「……じゅあ」

パクッ

「う…辛…けど美味しい…」

「だらー、ほらー。田向も食え」

「じゃあ…」

「辛いほど……たしかにうまい」

「だろ……」

「…………」

そして俺らは食事を終え、俺と口向は寮へ戻った。何故かゆりはずつと黙つていた。

「……してもゆりっぺにあへんをするなんて。
流石だぜ氷室。ゆりっぺでしてたし」

「さうか？あへんしちゃまずかったか？」

「……鈍感だ」

意味がわからん……。

いついて俺の初めての作戦は終止符を打たれた。

眠いから寝よ……。

（ゆり side）

氷室君にあ～んをされてしまった。少し恥ずかしかったけど……嬉しかった……
また何考えてんだろ私。
…………寝よ。

作者「無事オペレーションナルネード編を終えた」
「」

遊佐「ちよつと私の出番が少ないです…」

作「まあやつやーナブキャラだか」
「ひ

遊「もひと玉番増やしてくだせ」

作「でも…「増やしてくだせ」

作「……考えてねます」

遊「それじゃあ…」

作・遊「次回をお楽しみに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639y/>

Angel Beats! + オリ主 ~Another story~

2011年11月20日03時55分発行